

『カンタベリ物語』本文の中でチャーサーが初めて使用した ラテン語とフランス語の研究(4)

保谷 一三

これはチャーサーが『カンタベリ物語』本文ではじめて借用したラテン語とフランス語の研究である。今回は(3)に続き, 109. *dacon*~144. *embassadrye* までの36語を扱う。借用の年代は1386年(頃)と確定しており, これとフランス語における初出年とを比較し, 借用の早さ, 借用の文化的背景を論じる。その際大陸のフランス語と英国のフランス語とを区別し, なじみのフランス語から海峡の彼方のフランス語からかによって借用の意味のちがいを明らかにする。

キーワード: チャーサー, ラテン語, フランス語, 借用語

109. *dacon* *n*¹⁾ (OF)²⁾ D³⁾. Som⁴⁾. 1751⁵⁾.

A *dacon* of your blanket, leve dame,
(Our suster dere, lo! here I write your name;)

(大意) あなたの毛布の切れ端一枚で結構です, (親愛なる)奥さん。(お恵みを! この杖に御名前を書かせていただきますぞ。)

Greimas⁶⁾によると *dacon* は OF XIII^es. 初出で, 《*grosse dague*》の意。大型の短剣の意から転じて比較的に大きな切れ端の意となっている。108. の *dagge* が ‘a strip of cloth’の意で, OF *dague* 《*poignard*》(短剣)の意から転じているのを参照。

110. *damageous* *a* (AF) I. Pars. 435-40.

(/And forther, certes pryde is greetly notified in holdinge of greet meinee, when they be of litel profit or of right no profit./) And namely, whan that meinee is felonous and *damageous* to the peple, by hardinesse of heigh lordshipe or by wey of offices./

(大意) (さらに確実な話としてごう慢は家来を沢山抱えている場合に非常に多くみられると言えます。ほとんどあるいは全く何の利益にもならないのになです。)つまり家来共が町民に悪さをし危害を加えるのもお偉いさんのごう慢と公の地位があるからです。

Greimasによると OF *damageos*, -giosで1160年初出。Rothwell⁷⁾によると AF *damagous*, -ge(o)us, jous ‘harmful, detrimental’で, 綴りから見て AF が適当と考えられる。

desavenaunt et damageus a autrui (他人に不都合且つ有害な) *Scot Docs* 32といった例文がある。

111. *dampnably ad* (AF) B. Mel. 3015-20.

(/For wel we knowe, that your liberal grace and mercy...; /) al-be-it that cursedly and *dampnably* we han agilt agayn your heigh lordshipe, /

(大意) (と申しますのは確信があるからでございます。あなた様は気持よく許して下さい…) たとえ私達のあなた様に対して犯した (=奥様とお嬢様を襲撃した) 罪がいかにか呪わしく, 忌わしくても (何とかしていただけると思うのでございます。)

Greimasによると OF *damnable* fin XII^es. 初出。*dampnable* は記載がないが, 動詞に *dampner* があるので不可能ではない。Rothwellによると AF では *dampnable* がむしろ普通のものである。従って AF としてよいと考える。

112. *declinacioun n* (OF) F. Fkl. 1246.

Phebus wex old, and hewed lyk latoun,
That in his hote *declinacioun*
(Shoon as the burned gold with stremes brighte;

(大意) (12月の) 太陽 (=アポロン) は年老い、色褪せて黄銅ようになった。赤緯が高かった頃 (=夏) には燃え盛る金のように明るい光線を放っていたのに。

declinacioun は *decliner* (傾く) の名詞で、天の赤道に対する太陽の傾きを表わす。hote *declinacioun* においては *zodiac* の十二宮のうち *Cancer* (=Crab) の *sign* に太陽がいる。

Greimas によると OF *declinaison, -ation* XIII^es. 初出。Rothwell では動詞 *decliner* しかないが、公文書をデータとしているので、天文学用語は出にくいとも考えられる。一応 OF としておく。

113. *dedicat pp* (AF) I. Pars. 960-5.

The thridde circumstance is the place ther thou has do sinne; whether in other mennes hous or in thyn owene; in feeld or in chirche, or in chirche-hawe; in chirche *dedicat*, or noon.

(大意) 第三の要点はどこで罪を犯したかです。他人の家かそれとも自分の家か。野原か、教会の中か、それとも教会の生け垣でか、祭り主のある教会の中でか、そうでないか。

Greimas によると OF *dedier*。従って *pp* は *dedié* (t)。Rothwell によると AF *dedicat* 'dedicated (to)'²⁾で、例文として *Ciminters ou autres lieux a Dieu dedicats* (墓地その他の神を祭る場所)。従って AF とできる。OED は L. *dedicatus* との関連を言うのに留まっている。

114. *diffinitif a* (OF) C. Doc. 172

(The luge answered, 'of this, in his absence.)
I may nat yeve *diffinitif* sentence.

(大意) (町奉行が気に入った他人の娘を自分の娘と主張し、妾にしてみまおうと考えた。そして共犯の男に言った。「この件については被告不在では) 確たる判決は下せない。」

Greimas によると *définitif fin* XII^es. 初出。Rothwell によると AF では *diffinitive* だけ。従って *dif*-のような不純な発音は AF になじむが、一応 OF としておく。

115. *degysinesse n* (AF) I. Pars. 410-5.

And, as seith Seint Gregorie, that precious clothing is coupable for the derthe of it, and for his softnesse, and for his strangenesse and *degysinesse*, the superfluitee, or for the inordinat scantnesse of it.

(大意) そして聖グレゴリーも言うように、凝った衣服は罪となります。金がかかるからです。また柔らかすぎ、珍奇、派手、浅薄で、また不釣り合いに肌を見させるからです。

Skeat によるとチョーサーは *Le Roman de la Rose*, l. 827 から *degyse* 'fashionable' (OF *desguise*) を取り出して使った。チョーサー訳では *Mirthe* は *Wrought was his robe in straunge gyse*, 839⁸⁾。原詩は *Lecoy* 版によると *Deduis* は *Moult fut la robe deguisee* 821 である。Greimas によると OF *desguisier* 《*se travestir, changer d'apparence, d'ornements*》で、*desguisé a* は XIII^es. 初出、《*chargé d'ornements; extraordinaire*》。Rothwell によると *deguisement, degisement ad* がある。例文として *hommes degisement arrangé... pur moummere* (物真似のため仮装した…人々) がある。従って意味は OF, AF に差はないが、AF *degisement* を綴り上の手がかりとして AF としておく。OF は *-gu-* に拘わるからである。

116. *deynteuous a* (AF) E. Mch. 1714

Thus been they wedded with solempnitee,
And at the feste sitteth he and she
With other worthy folk up-on the deys.
All full of loye and blisse is the paleys,
And full of instruments and of vitaille,
The moste *deynteuous* of al Itaille.

(大意) かくして両人はいともおごそかに結婚式を挙げました。祝宴には両人、並びに他の貴賓が壇上に座り、会場は喜びと祝福の声で満ち満ちました。多くの楽器が奏でられ、沢山の食べ物が出されました。まさにイタリー中 (ここはロンバルディア) で最も美味しい食事でした。

Greimas によると OF に名詞 *dainté, daintee* 《

honneur → bon plat, morceau de choix》がある。Rothwellによると AF *deinté* 'dainty, choice morsel' がある。形容詞は共に記載がないが、綴りからみて AF としておく。

117. *demoniak a* (OF) D. Som. 2240

(What, lo, my cherl, lo, yet how shrewedly

Un-to my confessour to-day he spak !)

I holde him certeyn a *demoniak* !

(大意) (資産家が尻の下にいいものがあるから手を入れろ (あげるぞ) と言い、修道僧が手をつっ込むと大きな放屁をした、と耳にした村長が言った。「何と、資産家奴、今日は修道僧に向い何と底意地の悪い口をききおったことか。/) まことにもって彼奴は一匹の鬼だ。/)」

Dauzat⁹⁾によると OF *démoniaque* XIII^es. 初出。教会ラテン語。起源は *daemoniacus* で III^es. 初出と古い。Rothwell には記載がない。

OF-que を -k と綴るのは AF の特徴であるが、一応 OF としておく。

118. *demonstratif a* (AF) D. Som. 2272.

By preve which that is *demonstratif*,

(That equally the soun of it wol wende)

(大意) (車の12の輻 (々) の先端に十二人の弟子の鼻をつけさせ、車軸の中心で資産家に放屁させれば) 絶対確実に (音が均等に伝わるでしょう。)

Dauzat によると OF *démonstratif* 1327年初出。ラテン語 *demonstrativus* に由来する。Rothwell によると AF でも *demonstratif* がある。

119. *deryved pp* (AF) A. Kn. 3038.

(The which is prince and cause of alle thing,

Converting al un-to his propre welle,)

From which it is *deryved*, sooth to telle.

(大意) (この人 (=ジュピター大王) は万物の主であり、原因です。すべてを彼の許に回帰させ、) すべては彼の許から現出するのです。これは本当の話です。

*The Riverside Chaucer*¹⁰⁾によると、この箇所は

チョーサーのボエチウス訳 Book IV, Metrum 6, 47-54 と照応する¹¹⁾。Dauzat によると OF *deriver* 1130年初出。《*détourner l'eau*》(水の流れを変える)の意。Rothwell によると AF *deriver va* 'stem (from), originate (in)'. 例文として *Quant ke de Adam est dirivé* (異綴) *Home devient plein de deblie* (人は (罪人) アダムから出ているだけに罪深い。) *Mirur* 89 va 13. がある。

120. *descensories npl* (AF) G. CY. 792

(And sondry vessels maad of erthe and glas,)

Our urinales and our *descensories*

(大意) (また様々な容器が土とガラスで作られます。) フラスコとか上火式蒸溜器とか。

Greimas によると OF *descensoire* fin XIII^es. で、錬金術師の道具で、これに言及しているのは Jean de Meung である。本は Skeat によると *Les Remonstrances de Nature* II. 39-40 である。Rothwell によれば AF には *descens* 'fall, descent' があるだけ。しかし OF-oire を AF-orie と変えた上で英語としている。

121. *desk n* (med. L) F. Fkl.1128.

(a book...Of magic naturel, which his felawe,

...)Had prively upon his *desk* y-laft ;

(大意) (自然魔術...の本を学友が) 机の上に秘かに置いておいた (のを手にし)

desk は L. *discus* に由来するが、本来円板を意味する。*The American Heritage Dictionary* によると机の意の *desk* は Medieval Latin *desca* に由来する。

122. *determinat a* (L) D. Fri. 1459.

Han ye figure than *determinat*

on helle,...

(大意) (協会が召喚吏が悪魔に言った。「君は僕のような人間の姿をしているが、じゃあ君の居所である) 地獄でもはっきりした姿をしているのかい。」(悪魔は答えた。「そうじゃないが、なりたいたいと思えば人にも猿にでも天使にでもなれるよ。...」)

Skeatによるとこういう議論が当時好まれたらしい。

Greimasによると *determiner* 1119年初出。Dauzatによると *déterminé* 1361年初出。Oxford Middle English Dictionaryによると *determinat* はチョーサーの *The Astrolabe* i. 21, ii. 18に見られる。この原著はサンスクリット語で書かれ、チョーサーはそのラテン語訳に基いたようである¹²⁾。従ってラテン語をそのまま英語として使った例となる。現代綴りは *determinate*。

123. *digestioun n* (AF) F. Sq. 347.

The norice of *digestioun*, the slepe,
Gan on hem winke,...

(大意) 消化の乳母の眠りが人々にウィンクしはじめた。(大いに飲み、大いに働いたらお休みなさいね。)

Dauzatによると *digestion* 1265年初出。Jean de Meungの使用による。Le Roman de la Rose 16062行に出、《*élaboration, transformation*》の意¹³⁾で、こと関りが無い。Rothwellによると AF *digestiun, de-, digestion 'digestion'*で、例文として *Large peytryne et grosse haunches signifie prowessse, hardiesse, bon sen et bone digestion* (広い胸巾、張った尻は豪胆、すぐれた判断力、旺盛な消化力を示す) *Secr*² p. 16がある。フランス語の動詞 *digérer* は1361年初出で《*calmer la colére*》、《*mettre en ordre*》の意にはじまり、《*faire la digestion*》(消化する)は XIV^e S. からとなっている¹⁴⁾。従って AF, OF はほぼ同時に「消化」義を持ったと考えてよいかも知れない。

124. *digestives npl* (?) B. NP. 4151.

A day or two ye shul have *digestives*
(Of wormes, er ye take your laxatives,)

(大意) (悪夢を見て声之急におかしくなったおんどりに向けてめんどり妻が言った。)
「一日か二日消化剤をお飲みなさい。(成分は虫です。そのあとで軟下剤を飲んで下せばよくなりますよ。)

Dauzatによると *digestif* XIII^eS. 初出。形容詞。Rothwellによると AF も同綴で形容詞。名詞用法はチョーサーが初めてである¹⁵⁾。

125. *dilatacioun n* (OF) B. ML. 232

What nedeth gretter *dilatacioun*?

(大意) これ以上長々とお話しする必要がありませんか? (回教徒の夫はキリスト教徒の妻との間でキリスト教を宗旨とすることで合意したのです。)

Dauzatによると OF *dilatation* は1314年初出。Rothwellによると AF には名詞がなく *dilatoire, dilatorie* (law) *dilatory* のみ。-cioun は AF 形であるが、このような転換は簡単なので、事情の全体から OF としておく。

126. *dishoneste a* (AF) E. Cl. 876.

Ye coude nat doon so *dishoneste* a thing,

(大意) (グリゼルダは若い美しい妻(本当は別に育てた夫婦の間の実の娘)を娶るから生家に下れと侯爵の夫に言われ、「貧しい家から嫁いだので何もいただかずに下りますが、二人の子を産んだ母として裸で歩くわけには参りません。上っぱりもつけずに行け) というような辱しめはなさらないと存じます。」(と言った。)

Greimasによれば、*deshonester v* ((*déshonorer*))がある。Rothwellによると AF *deshoneste, dis-'dishonorable'*がある。ラテン語の接頭語 *dis-* はロマンス語では一貫して *des-* となった。これを採用した英語はその後一貫して *dis-* に戻った。AF の *des-*, *dis-* の共在は OF にはなかった。従ってここは明らかに AF である。

127. *deshonestee n* (AF) I. Pars. 830-5

The felawes of Abstinence been Attemperance,
that holdeth the mene in alle thinges: eek Shame,
that eschueth alle *deshonestee*: ...

(大意) 節制の同類には節度があります。これは何事によらず中庸を守ります。また恥もあります。これはあらゆる不名誉を避けます。...

Greimasによると、*onesté x^s* で、否定形の記載はない。*lexis*によると PF *déshonnête* は1283年初出、*déshonnêteté* は初出年不明。Rothwellによると、AF に *honesté, -ee* がある。否定形は記載がないが AF では *des-*, *dis-* 両方が共在する上、*-ee* という語尾は AF

に特有のものであるので AF とする。

128. *disobeye* *v* (AF) E. Cl. 363

In werk ne thought I nil yow *disobeye*,

(大意) 何をし、何を考えても私 (グリゼルダ) はあなた (ウォルター、グリゼルダの夫の侯爵) に背くようなことは致しません。

Dauzat によると *obéir* 《*écouter*》は1120年初出。*désobéir* は1265年、Jean de Meung の初使用。Rothwell によると AF は *desobeyer* がふつう。しかし *disobeissance* もある。dis- と bey- は AF の特徴として、AF としたい。

129. *disordinat* *a* (L) I. Pars. 420-5.

Upon that other syde, to speken of the horrible *disordinat* scantnesse of clothing, as been thise cutted sloppes or hainselins, that thurgh hir shortnesse ne covere nat the shameful membres of man, to wikked entente.

(大意) 他方ひどく度外れたむき出しルックの衣服について言うなら、緩い短衣も短い上着も人間の恥部を意地悪な目からかくしていません。

Greimas によると OF *désordonné* は *début* XII^s. 初出。しかし意味は《*débauché*》で、この文章と意味の合う《*ou il n'y a pas d'ordre*》は1538年の初出である。Rothwell によると AF *desordené*, -*iné*; *disordiné* 'immoderate' で、AF に分がある。しかし *The Riverside Chaucer* の explanatory notes によると、この箇所は Peraldus の *Summa vitiorum* (1236) から素材を得ており、ラテン語 *disordinatus* を直接に英語化したといえる。英語はその後 *disordinate* と綴り、今は廃用となっている。

130. *displesant* *a* (AF) I. Pars. 695-700.

Certes, aboven alle sinnes thanne is this sinne (= sinning in the holy ghost or despeir of the mercy of god) most *displesant* to Crist, and most adversarie.

(大意) 確かな話、その故にわけてもこの罪 (= 聖霊に対する罪又は神の愛を諦める罪) は甚だキリスト

の意思に合いません。いや意思に反します。

Greimas によると OF *déplaire* 1130年初出。(pleire は1080年初出。) もとは *lat. pop.* (俗ラテン語) の **displacere*. Dauzat によると *déplaisant* 1190年初出である。一方 Rothwell によると AF *desplere*, *displere* の両形がある。現在分詞は肯定形だけだが *plaisa(u)nt*, *pleisa(u)nt*, *plesant* がある。こうしたことから AF とできる。

131. *dissimulacioun* *n* (AF) D. Sum. 2123.

(He wolde that the frere had been on-fire)

With his false *dissimulacioun*.

(大意) (彼 (= 資産家トマス) は僧院の建設費をくれと頼む修道僧が) わざと本心を隠して (熱弁を振っているのであればよいが) と思った。

lexis によると *dissimulation* は1190年の初出。動詞 *dissimuler* 《*cacher*》は1360年の初出で、動詞の方が新しい。*dissimulatio* は古典ラテン語として存在する。Rothwell によると AF *dissimulacion*, -*ciun*, -*tiun*. -*ion* は -*ioun* とほとんど同じなので AF としておく。

132. *dissimulour* *n* (AF) B. NP. 4418.

False *dissimulour*, O Greek Sinon,

(That broghtest Troye al outrely to sorwe!)

(大意) 意図をわざと隠した (脱走兵といつわり木馬を城内に引き入れさせた) ギリシア人サイノンよ、(おかげでトロイは完全に滅びてしまったぞ!)

Dauzat によると (古典ラテン語 *dissimulator* に由来する) F *dissimulateur* 1493年初出。*dissimulation* 1190年初出や *dissimuler* 1360年初出と比べて極めておそい。Rothwell によれば AF には何もない。OED によるとこの形のように動詞幹に直接 -*eur*, -*our* を加えて行為者名詞を作るとは OF, AF で共に行われた。従って -*our* だけを手がかりとして AF としたい。

133. *diurnal* *a* (L) B. ML. 296.

(O firste moevyng cruel firmament,)

With thy *diurnal* sweigh that crowdest ay

(And hurlest al from Est til Occident.)

(大意) (ああ第一動天たるむごい空よ,) その日動によって (万象は東から西へと押し動かされる。)

The Riverside Chaucer の explanatory notes によるとこの部分は Ptolemy の *Almageste* 第一巻, 第八章に該当する。このラテン語版をチャーサーが使ったか。Dauzat によると diurnal fin XVII^es. でチャーサー以後である。Rothwell にはない。古典ラテン語は diurnalis である。

134. diurne *a* (L) E. Mch. 1795.

Parfourned hath the sonne his ark diurne,

(大意) 太陽は一日の円弧を描き終った。lexis, Dauzat によると diurne *a* 1425 でチャーサー以後である。Rothwell にはない。古典ラテン語は diurnus である。ここでの使用なので天文学のラテン語をそのまま英語に転用したとみられる。

135. divynailes *npl* (AF) I. Pars. 600-5.

What seye we of hem that believen in *divynailes*, as by flight or by noyse of briddes, or by bestes, . . . ?

(大意) どうでしょう。世の中には占いを信じている人々があります。鳥の飛び方や鳴き方, また動物 (のほえ方, 動き, 内臓) …によってそれが出来るということです。

Greimas によると devinaille 1160年初出《sorcerie》の意。Rothwell によると AF に devinaille, divinaille, ail, ale が 'divination' の意で存在する。例文として Devinail proprement soune en mal (占いは本来的にいかがわしい) *Mir Just* 15 がある。綴り(又は発音)の特徴から (de-でなく di-があることから) AF とできる。

136. divimistre *n* (OF) A. Kn. 2811.

(His (=Arcites) spirit changed hous, and
wente ther,
As I cam never, I can nat tellen wher,)
Therfor I stinte, I nam no *divinistre* ;

(大意) 彼 (アーサイト) の心はありかを変えそこ

へ移って行ってしまいました。私の出所ではないのでどことも言えません。)ですから言うのは止めます。神学者でもないし。

Dauzat によると divinateur XV^es. である。Rothwell によると devineur, divineur 'soothsayer' である。OED によると OF 語尾 -ister, -istre が英語に入って英語の語尾として使われた。すると divineur → divinistre はチャーサーによる改造ということになる。

137. dominacioun *n* (AF) C. Pard. 560.

(Thy tonge is lost, and al thyn honest cure ;

For dronkenesse is verray sepulture

Of mannes wit and his discrecioun.)

In whom that drinke hath *dominacioun*,

(大意) (舌がもつれ, 品位も完全に失います。というのは酩酊は理知分別の死であり,) アルコールが人格の主となるからです。

Dauzat によると domination 1120年初出。Rothwell によると AF dominacion, -ioun 'domination' 例文として les signes (sc. of Zodiac) ont grant signeurie et dominacioun de les membres susdis (sc. of human body) (十二宮のそれぞれは人体各部を非常に支配します) *Man lang* 45. がある。

138. dotard *n* (AF) D. WB. 331.

For certeyn, old *dotard*, by your leve,

(You shul have queynte right y-nough at eve.)

(大意) 嘘じゃありませんよ, 老ぼれ (の免罪符売り) さん。(今晚たっぷり楽しませてあげますよ。)

OED によると AF doter は OF redoter (1080年初出) 《tomber en enfance, radoter》に由来する。Greimas によると radoteur milieu XVI^es. 初出。これはチャーサー以後である。OED によると -ard は軽蔑語の語尾でフランス語から英語に入っても盛んに使われた。drunk-ard は1530年初出でその一例とされる。するとチャーサーは AF doter から dot-を取って語幹とし, -ard を加えたことになる。

139. durable *a* (AF) I. Pars. 1035-40.

... that orisouns or preyeres is for to seyn a pitous wil of herte, that redresseth it in god . . . , to remoeven [bodily] harmes and han thinges espirituel and durable. . . .

(大意) 祈りや祈とうは敬けんな心の中を告げ、神にきいてもらうためです。体の病や傷を除き、聖なるもの、不変なものを取り入れるためです。

Dauzatによると durable 1080年初出。Rothwellでも durable 'lasting' がある。例文として Riens ne vei durable en cest mund (この世では何もかも不変でないことがわかるだろう) *S Laur* 54. がある。

140. esement *n* (AF) A. Rv. 4179.

Som esement has lawe y-shapen us ;

(大意) (ケンブリッジのキングズホールカレッジの二人の学生ジョンとアレンは土地の商売を独占し、しかも依頼人の粉をくすめると評判の粉ひきに償いをさせようと思立った。アレンがジョンに言った。)法律も補償というものを定めている。

Greimasによると aisement XI^es, 初出。《jouissance》の意。Rothwellによると AF eisement, ais-, ease- 'relief, benefit, (law) easement' である。語義と語形の両面で AF といえる。例文として Alice n' ad rens si nun esement de pasture (アリスは牧草地を補償にもらわなければ何ももらえない) *YBB* 20-21 Ed I 355. がある。

141. effectueel *a* (AF) D. Som. 1870.

Our orisons been more effectueel,

Dauzatによると effectif XIV^es, 初出。一方 Rothwell では effectuel 'effective' で、例文として lez testamentz qe poent estre trovés bones et loialx sount effectuelle (*sic*) … (正しい、合法的であると判じ得る遺言は有効である) *Bor Cust* ii 195. がある。従って確実に AF 由来である。

142. elaat *a* (L) B. Mk. 3357

This king of kinges proud was and elaat.

(大意) この王中の王は高慢尊大だった。

Greimasによると elacion fin XII^es. 初出。Rothwellによると elaciun, -cion(e, -tion/arrogance, haughtiness' がある。ラテン語の過去分詞 elatus からの直接の英語化についてはボッカチオの *De casibus virorum illustrium* が下敷きになっている¹⁶⁾ことが関係していると思われる。

143. Elacion *n* (AF) I. Pars. 390-5.

(...the harmes that cometh of Pryde, . . .)/Ther is Inobedience, Avauntinge, Ipocrisie, Despyt, Arrogance, Impudence, Swellinge of herte, Insolence, Elacion, . . . /

(大意) (高慢の害は……)不従順, 大風呂敷, 偽善, 侮蔑, 生意気, ごう慢, 尊大, …です。elacion は OF にも AF にもある。*The Riverside Chaucer* の explanatory notes によると 390-474 には an Anglo-Norman analogue があることを考慮して AF とする。Rothwell の例文には elacion, ceo est aver le quer hautein (尊大とは偉ぶった心を持つことである) *Pecchez* 208rb がある。

144. embassadrye *n* (AF) B. ML. 233.

I seye, by tretis and embassadrye, . . .
(That, in destruccioun of Maumetrye,
And in encrees of Cristes lawe dere
They ben acorded, ...)

(大意) はっきり言います。条約と交渉により…… (回教を止め、価値あるキリスト教を伸長させることで合意があったのです。)

Greimasによると ambasse, -ee 《ambassade, mission》1298初出。Dauzatによると ambassadeur XIII^es. 初出。Rothwellによると AF ambassadeur, ambassadeur がある。em-はチャーサーの語と一致する。OEDによると OF 語尾-erie は英語に採用され初め-rie, -erie のまま、のちに-ry と綴り変えられて、沢山の語に付加された。例として yeomanry などがあげられている。チャーサーのこの語もこうした新語の一つということになる。em-と-rye の二つから AF 系の英語と断定できる。

(続く)

るかを示す。

文 献

- | | |
|---|---|
| <p>1) <i>n</i> は noun を示す。以下品詞の英語名の略語がここに来る。</p> <p>2) OF は Old French を示す。以下語源となる言語の英語の略語がここに来る。</p> <p>3) D. Skeat ed. <i>The Works of Geoffrey Chaucer</i> の volume IV (TEXT)の目次に表示された物語の集団分類記号で、アルファベット順になっている。</p> <p>4) Som. Skeat の TEXT 目次に出る The Somnours Tale の略語。</p> <p>5) 1751. The Somnours Tale の行番号。何行目であ</p> | <p>6) Greimas: <i>Ancien Français</i> 1968.</p> <p>7) Rothwell: <i>Anglo-Norman Dictionary</i> 1977. (未完, Fascicle 6 まで既刊)。</p> <p>8) 3)の全集本の第一巻 p. 128に出る英訳。</p> <p>9) Dauzat éd.: <i>dictionnaire étymologique</i>.</p> <p>10) <i>The Riverside Chaucer</i>, 3rd ed. OUP.</p> <p>11) 10) の explanatory notes による。</p> <p>12) 3) の全集本の第三巻 p. 1xix.</p> <p>13) Lecoy éd. <i>Le Roman de la Rose</i> の glossaire による。</p> <p>14) 9) による。</p> <p>15) OED による。</p> <p>16) 10) の explanatory notes による。</p> |
|---|---|

Abstract

**A Study of Latin and French Loan Words Which Chaucer
First Used in *The Canterbury Tales* except the General
Prologue (4)**

Katsuzo HOYA

This is the fourth installment of a study of Latin and French loan words which Chaucer first used in *The Canterbury Tales* except the General Prologue. This time I treat the next 36 words, No. 109 dagon to No. 144 embassadrye. The date of the first borrowing is ascertained to be about 1386. The present study compares the date with that of the first recorded appearance in French, and elucidates the rapidity, and the cultural background, of borrowing. Special emphasis is placed on distinguishing the two sorts of French, Continental French and Anglo-French (or Angle-Norman), thus making clear the nuance of borrowing. (To be continued)

Department of Foreign Languages (English)